平成26年度　広島県特別支援学校教育研究会　第1分科会

障害の重度・重複化への対応について

《指導助言者》川口 数巳江（県立教育センター特別支援教育・教育相談部　指導主事）

《研究推進スタッフ》

チーフ	岡田　眞江	（広島県立広島西特別支援学校　教頭）
サブチーフ	田中　由紀子	（広島県立広島中央特別支援学校　部主事）
研究スタッフ	橋本　潤	（広島県立尾道特別支援学校　教諭）
	中野　紘之	（広島県立尾道特別支援学校　教諭）
	上山　貴士	（広島県立広島特別支援学校　教諭）
	岩澤　範子	（広島県立広島特別支援学校　教諭）
	森本 智絵里	（広島県立広島特別支援学校　教諭）
	馬場　健	（広島県立福山特別支援学校　教諭）
	竹森　剛	（広島県立広島西特別支援学校　教諭）
	井上　藍	（広島県立廿日市特別支援学校　教諭）
	花岡　加奈	（広島県立呉特別支援学校　教諭）
	酒井　敏郎	（広島市立広島特別支援学校　教諭）

※　研究スタッフ10名

はじめに

重度・重複障害のある児童生徒の実態把握は，目標が抽象的になりがちで，適切な評価が難しい現状がある。

肢体不自由のある幼児児童生徒は，生きる力（思考力・判断力・表現力）の育成のうち，特に「表現する力」の育成が重要である。

「表現する力」に焦点を当てて文献研究，ビデオによる授業分析を行い，目標と指導と評価の一体化を目指す授業研究を進めることにした。

研究仮説及び研究方法

研究仮説

ビデオによる授業分析を行い，客観的な評価に基づいた授業改善を展開すれば，児童生徒の表現する力が向上するだろう。

研究方法

（1）「表現する力」に関する文献研究

（2）実践研究

① 各校の実態把握表を活用した実態把握，「表現する力」の育成を中心とした実践評価シートの作成（実態把握・目標設定・指導方法・内容・評価規準）・実践

② ビデオによる授業分析を通した実践の検証・評価・改善

文献研究

・コミュニケーションの四つの段階

聞き手効果段階

⇩ 表出から表現へ（受け手効果）

意図的伝達段階
命題伝達段階
文と会話段階
} 意図的コミュニケーション≒表現

竹田契一監修，里見恵子他著『実践インリアル・アプローチ集』平成17年日本文化科学社P.23から一部引用

表現する力

意図的コミュニケーション ≒ 表現

コミュニケーション

事例研究1―①

生徒の実態

・脳性まひ。強緊張と不随意運動を併せ有する。
・聴覚は良好。視覚的には左前方30～50cmがよく見える。
・快や不快は声や表情で表現する。
・Yes/Noの意思表示が不十分である。

目標

A. 音声の指示を聞き，身体の部位を動かす。
B. 問いかけに対して，現存する能力を活用して応答できる。

評価規準

A. 音声の指示を聞き，対象物を見て，対象物に手を伸ばし，一回でも触ることができる。
B. 二者択一の選択を求める問いかけに対し，声や視線で一つを選択することができる。

事例研究1―②

VTR①

A. 好きな音楽を聴くためにタブレット型端末の画面に触れる活動

B. 二者択一の選択を求める問いかけに対し一回返事をして一つを選択する活動

グループから出た意見

A. 生徒の手が触れても対象物が反応しないときがある。
⇒対象物を固定する。

B. 生徒が問いかけの内容を理解していないのではないか。
⇒選択を求める問いかけの仕方を見直し，生徒に分かりやすい形を再構築する。

事例研究１－③

VTR②

A. 音声の指示を聞き，スイッチを押す活動

B. 二者択一の選択を求める問いかけに対し一回返事をして一つを選択する活動

児童生徒の変化

A. ・対象物に手を伸ばす速さが速くなった。
・より正中線に近い場所の対象物に手が伸びるようになった。

B. ・二者択一の問いかけに対し，声や視線で応えられるようになった。

事例研究２―①

生徒の実態

・肢体不自由と知的障害を併せ有する。
・発語はないが嬉しいとき，嫌なときに表現することができる。
・Yes/Noの意思表示をすることができる。
・車椅子を自分で操作して行動することができる。
・ほめられることが好きで，評価してほしいときに発声する。

目標

A. 支援機器を操作して,自分の意思を伝えることができる。
B. あいさつ等を通して人との関わりを広げる。

評価規準

A. 型はめや写真等のマッチングを正しく行うことができたか。
B. 嫌がらずにあいさつをすることができたか。

事例研究２―②

VTR①

A. 朝の会のマッチング（顔写真，天気）

B. 朝のあいさつ

グループから出た意見

A. 発達に応じた言葉の統一
⇒ほめる言葉や名詞の説明

B. 指導者と児童の目線の高さが違う。
⇒目線の高さを合せることで，あいさつしやすくなる。

事例研究２－③

VTR②

A. CDの反射光を用いて天気（晴れ）を伝える。

B. 児童の机を高くして目線を合わせる。

児童生徒の変化

A. 動きが多くなり，機器をしっかり押せるようになった。

B. 人と関わるとき，よい表情が増えた。

研究のまとめ

成果

実態把握による課題の明確化
① 具体的な行動
② 回数，時間などの具体的な数値
③ 場所と行動を限定
④ 支援を少なくする

ビデオを用いた授業分析による授業改善
① 実践の振り返り
② 児童生徒の表情や行動の小さな変化や反応への気付き
③ 複数での協議により新たな視点の発見

研究のまとめ

課題

◆環境的な要因や心理的な影響を受けやすい。
◆目標設定を数値化が適切かどうかを判断しにくい。
⇒複数の視点で目標が適切かどうかを判断する必要がある。

◆「表現する力」に関するフォーマルアセスメントが少ない。
⇒同じ指標で実践把握ができるアセスメントが必要